

新・下野市風土記

博物館・資料館の展示



下野市教育委員会 文化財課

展示はマラソンのごとし

例年、ゴールデンウィーク前後には、博物館などで特別展や企画展と銘打った展示が開催されます。これらの展示は、大規模なものだと数年、小規模な企画でも半年程度の時間をかけて開催に至ります。

学芸員は、通常業務と並行して、

- ・特別展示や企画展示の展示構成の考案
- ・必要な展示資料や史料をリストアップ
- ・借用交渉、運搬、展示
- ・解説パネルの作成
- ・図録の作成にともなう資料・史料の写真撮影や原稿作成

これだけの準備を進めます。

国立博物館や県立博物館クラスの特別展の場合、3年から5年の準備期間の間に、各地の博物館、資料館や有名な寺社仏閣、個人など、相当数の管理者や所有者と、国宝や重要文化財・県指定文化財などを借用するための交渉を行います。考古学に関する展示の場合、調査時の遺跡

のネガやデータも借用します。

突然、予定の資料が借りられなくなるなどの予想外のトラブルが勃発することもあり、時間と予算の残り具合に最大限の注意を払いながら、マラソン選手のような気持ちでゴールを目指しますが、ゴールは開会日ではありません。会期が終了し、無事にすべての資料の返却を完了するまでは、気を抜くことはできません。

国宝や重要文化財を借用する際には、文化財や美術工芸品の梱包・輸送を専門とする業者に委託し、専用車両で移送します。

例えば甲塚古墳から出土した埴輪は、専用の和紙で包み、晒を巻いた上に緩衝材を詰め、木枠で梱包し、貨物庫の中に固定しました。

学芸員は、梱包・積み込み・運搬・到着後の搬入・開梱・設置など、すべての作業を指示し、移送のときは車両の後部座席に同乗します。京都や奈良の博物館などから国宝を借用すれば、関西から約8時間かけて搬送する間、片時も資料のそばを離れることはありません。

新型コロナと展示

冬の終わりから初夏にかけて、想定されてはいても現実のものになるとは考えたくもなかったクライシスのために、世界中で人々のライフスタイルと未来が大きく変わってしまいました。

経済や福祉、学校教育の問題と比べると、生涯学習や文化・文化財に関わる問題の序列はかなり後ろです。オリンピックの延期や春の選抜高校野球の中止ほど注目されませんでした。この数か月間に世界中の文化施設が閉館し、様々なイベントなどが中止となりました。

この間に文化財関係者といろいろと連絡を取りましたが、多くの方と「普通に仕事ができていることがどんなに有り難かったかと、改めて認識しましたよ」という会話を交わしました。

1月から2月にかけて開催された日本書紀成立1300年特別展「出雲と大和」（東京国立博物館）では、島根県からは国宝の銅鐸30点や銅剣・矛多数、出雲大社の直径1.3m級の巨大な柱（3本

1セットで約3m）など、奈良県からは約2.5mもの長さのメスリ山古墳出土の円筒埴輪、右上神宮に伝わる国宝七支刀、重要文化財の三角縁神獸鏡や仏像など、二度と一堂に観覧することはできないような貴重な資料の数々が展示されており、担当した学芸員の尽力に思いを巡らせました。

本来ならば3月までの会期だったものが、予定よりも早く閉会となってしまったのは、とても残念です。

東京国立博物館で開催予定だった「法隆寺金堂壁画と百済観音」と国立科学博物館特別展「和食」は、展示そのものが中止となってしまいました。

現在、全国の学芸員は、今までのハンズオンや触れる展示とは逆行する、「新しい生活様式」を取り入れた博物館・資料館のあり方、新たな展示のあり方を模索しています。